

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第195号（2022年8月）

常世の風に吹かれて呟いて（3） 白井啓治

（白井啓治氏の10年前のブログ記事から一部を

抜粋して連載します。）

『猛暑の波は返すことを考えているのだろうか』

（2012年8月2日）

月初めの木曜、金曜は毎度のことであるが尻に火が点いたように用を済ませねばならない。今月もまた尻に火が点いたようにPCとの格闘である。必死な格闘で暑さを忘れるかと言えばそうではない。昨日までは、暑さに躰が慣れてきたことを実感していたのであるが、今日はだめである。

ふるさと風の会報を編集しながら「なんて糞暑いのだ！」とつい大声を出してしまう。

何時にない大声の独り言を発すると、お猫様も、お犬様も危険を察知するのか近づいてこない。こういう状態を何とか解消しようと、会報の原稿締め切りを会員は25日と定めたのであるが、あまり守ってはもらえない。結局印刷日の前、二、三日はページ合わせの追加原稿の執筆、あるいは削除と言う面倒な作業が残る。仕事でもないのに何でこんなにまでしなければ…と思うが、これを止めたらずべてが終わってしまうので、もう少しやめるわけにはいかない。

今、お犬様がこっそりと足元にやって来て寝そ

べりながら、小生の顔色をうかがっている。

『暑さに躰が慣れても暑いものは暑い』

（2012年8月6日）

もう何日雨が降ってないだろうか。地面はカラカラである。少しお湿りが欲しい所であるが、一向に雨の気配がない。カラカラ日照りでトマトだけが甘みが増して舌を喜ばせてくれている。



（絵： 兼平智恵子）

我が家のお犬様は、日常にない音が嫌いで、何かの音が聞こえてくるとそれが大きいとかではなく直ぐに隠れようとする。毎日、夕方になると庭全体に水撒きをするのだが、植木の葉っぱにバラバラと音を立てるのがダメなのである。恐らく虐待されて野良の生活の時に豪雨などが危険と言う認識があるのだろうか、異様に怖がるのである。水撒きが始まるとハウスに駆け込みじつと蹲ってしまうのである。

最近、ホースを伸ばし始めると、家に入れてくれとせがむのである。

人の大声が嫌い、長い棒を持った人が嫌い、子供の集団が嫌い、…嫌いと言うより危険と認識するのだろうか。家でテレビを見ていて、暴力シーンなどの音が聞こえると机の下に飛び込んで行ってしまうのである。

もともとは野良ではなく、お婆ちゃんに変わっていたのであったが、お婆ちゃんがなくなつてから、虐待を受けるようになって野良になったのであるが、虐待を思わせるような音が聞こえると安全地帯を捜し身を隠すことばかりを考えるのである。

随分、顔も穏やかになり、落ち着いてきたのであるが一度刷り込まれてしまった恐怖心はなかなか抜けることはないだろうと思う。今も足元に寝ているのであるが、小生の足に躰を当てていないと安らげないらしい。フサフサ毛の首を足の上に乗つけて安心しているのであるが、大層に暑いことである。

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

木下明男 090-4715-5527 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府4-3-32（木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

異説 三味塚古墳 「風の姿」 兼平智恵子

ふるさと風の会「ことば座」で、平成二十年代に公演していました朗読舞劇を紹介しております。今回は行方市沖洲に存在する三味塚古墳をモチーフに近藤治平（故日井啓治）が書き下ろした、異説三味塚古墳「風の姿」をご案内します。

昭和三十年三月霞ヶ浦のほとりで一つの古墳が発掘されました。堤防工事に伴い墳丘が崩され埴輪が出土したことがきっかけでした。古墳は地元の人々に古くから三味塚と呼ばれていました。

全長八七・三mの前方後円墳で、幅二四mの盾形周壕が巡り、後円部径四七m、前方部幅三六・五m、後円部高さ八m、前方部高さ六mの規模を有し、後円部の中心墳頂下二・七mに筑波変成岩（雲母片岩製の組合式箱式石棺が未盗掘の状態）で出土された。



金銅製馬型飾付冠

石棺には伸展葬の形での人骨で、馬飾りの付いた冠を被り、玉類を身につけた、推定身長一六二・五cmの成人男性とされている。体の両脇に大刀と剣がおかれ頭の上と足元には鏡や挂甲（鉄板を綴じ合わせたよろい）等の遺物がまとめて置かれ、石棺の蓋には縄掛けの為の突起が確認された。

墳丘には墳頂部・墳丘中段・墳丘裾の三重に巡る円筒埴輪列があり、墳丘裾には人物・動物を中心とした形象埴輪も確認されている。

築造年代は、五世紀末頃と考えられ、副葬品として、頭に被ったままの状態が発見された金銅製馬型飾付冠、身に付けていた金銅垂飾付耳飾、棺内に置かれていた平縁変形四神四獣鏡等、そして確認された円筒・形象埴輪、そのほか短甲・鉄鏃等多量の武器・武具が確認されていることから、軍事的性格をもつ、大和王権の東国支配の先兵的人物と捉えられている。

現在の三味塚古墳は平成一七年に復元整備され公園として地元の人々に親しまれています。

参考資料 明治大学リベリアアカデミー

第六八回考古学ゼミナール 他

（朗読舞劇）

霞ヶ浦賛歌

風の姿

朗読 白井啓治（故）

手話舞 小林幸枝

昔、霞ヶ浦はおだやかな内海だった。

園部川の注ぎ込むこの岸辺には、その頃はまだ風の姿はなく、人の暮らしもなかった。

森の暗闇に住む人間達には、身を隠す場所のない鏡の水辺は危険な所でしかなかったのであった。

時折回遊してきた鯨が、水面に高くしぶきを上げて飛行するのを、暗い森影から伺い、海は恐ろしいものだと認識するのだった。

ある時、風に吹かれて一人の天女が岸辺に舞いおりてきた。人間達はこれまで見たこともない暖かく優しい色を見た。そして風を頬に感じた。

人間達は、天女を風の姿だと思った。



人間達は、何時しか水に馴れ、岸辺の貝や小魚を捕って暮らしの作ることを覚えて行った。

森に木の実を求め、水辺に貝を求める豊かな暮らしが岸辺に生まれ、常世の国が生まれた。

平和な暮らしが続くかと思われたあるとき、黒坂命（くろさかのみこと）と建借間命（たけかしまのみこと）の二人が茨城と行方の両地から進行し、岸辺とその周囲の森に住む原住民を無差別大量殺戮を行ったのであった。

舞の民達が滅ぼされると思ったとき、何処からか馬にまたがった一人の勇壮な若者が現れ、黒坂と建借間の両軍を忽ちに蹴散らしたのであった。

若者の名は奈女比古（なめひこ）といった。奈女比古は、行方に生息した小型の野生馬を良く飼ひ馴らし、使う事に優れた才を持っていた。比古は舞の民を救わねばと思った。

舞の民に比愛（ひめ）という美しい娘がいた。比愛は舞の名手であった。奈女比古は、比愛の舞を初めて見たとき、その余りの美しさと、慈悲を秘めた風の流れていることを知り、自分の妻にしたいと、きめていたのであった。

比愛は舞の名手であった。奈女比古は、比愛の舞を初めて見たとき、その余りの美しさと、慈悲を秘めた風の流れていることを知り、自分の妻にしたいと、きめていたのであった。

舞の民は、奈女比古に助けられた。そして比愛は比古に恋をして、夫婦となった。馬を能(よ)く使う比古は、農耕に、陸の輸送に馬を用いた。そして、舞の民達と力を合わせて、豊かな常世の国を築き上げたのであった。

奈女比古と比愛に女の子が生まれた。「由愛」となずけた。母に似て美しく舞いにも大きな才を持つて生まれた。由愛(ゆめ)が娘になった時、比古は生きる真実を語りかかせた。

「生きるとは、恋しい人をもつこと。人は、恋しい人を持った時恋しい人のために力が与えられる。略々由愛が美しく生きたいのなら、大地にも、風にも人にも激しい恋をしなさい。真実の恋の生まれぬ里は必ず滅びる」

その日から由愛と比愛の母子は夕陽の湖岸に姿を見せる筑波山に向かって恋の舞を舞うようになった。

由愛は年頃になり、羽生の里の若者に恋をし、夫を迎え入れた。比古は翌日から野良仕事を、由愛の婿に任じ、村の中央に比愛と二人して塚を盛りはじめたのであった。周囲に高台のない地に盛り上げられた塚は霞ヶ浦と筑波山を一望する景勝の台地となった。

比古はこの塚を神々への感謝を示す舞に三昧する塚、三昧塚と名付けた。しかし、このことを後世に残すべく記された文献は何もなく、影の伝えずら知る人はいない。

ただ、千数百年の過ぎた現代に古墳と認識され、出土した金銅製の冠には多数の馬飾りが確認された。それは奈女比古が馬遣いの名手だったことの証なのであるが、そのことを知る手がかりも既らない。

終わり

今回は近藤治平(故白井啓治)が書き下した「風の姿」のあらすじでご紹介しました。

どうぞご愛読の皆さん、私のふるさと行方市 三昧塚古墳にお越しください。六号国道、土浦市方面からですと石岡 三王台交差点を右折、国道三五五号に入ります。石岡市、小美玉市、を過ぎ行方市に入りまもなく左側に登場します。山王台交差点から車で十五分位です。

高さ八mの墳頂では発掘状態の図が描かれています。

霞ヶ浦の入江と美しい紫峰の山筑波山と田園風景とマスクを外して大きく深呼吸してみてください。そして、大切な文化財です慈しみ下さい。

尚、故白井代表が書き下した「風の姿」には筑波嶺の恋歌として詠まれた万葉の歌が多く織り込まれています。

○木陰を追って掃くそよ風笑む

智恵子



風のことば絵同好会

我が人生の回想7

木下明男

少年期(小学生時代)・・・?

少年期(中学生時代)・・・?

昭和31年(1956年)小学校卒業と共に、台東区立蓬萊中学校へ入学。特別な能力があるわけではなく、ごく普通の中学生として通い始める。学校は、山谷地区のど真ん中にあり、教室の窓から隣接する旅館がもろに見える。開け放れた部屋の窓から、男女の裸の姿が見えたりする絶好?の環境だった。また通学の途中には、まだ朝だというのに酔いつぶれた労務者がゴロゴロ、手配師から溢れた労務者なのだろうか・・・?

青年期迄私が育った町、日本堤(旧名〓他中町)2丁目は浅草の一角です。明治通りの内側から、更に細い(1〓2メートルの幅路地に軒を並べ、空襲からの消却を逃れた地域です。路地の長さ数十メートルは、零細工場から沖繩泡盛の店、和菓子屋、洗濯屋、箱屋(果樹等の入れ物)、昔からの長屋、お菓子屋等々・・・20数件が軒を連ねていた。向こう三軒両隣の如く、互いに一挙一動が共有されている典型的な下町です。

小学校までであった給食はなくなり、従って毎日お弁当を持つていくように・・・。級友同士のおかず比べが始まる、おかずの中身が見た目の評価や母親の手作りの評価・・・男性なのに細かい事?学校は、酷く荒れていた訳ではないが、いくつかの小学校から集まるので勢力争いが起きる・・・?その勢力誇示のためか、矛先を先生に向け取組み合いが起きた・・・?学校の裏側には玉姫神社が、浅草三社祭の外れ(最東端)の地域でもある。

5月の半ばの日曜日は大賑わい、本祭りには千貫神輿（一宮）がやってくることもある。

二つ上の兄が、家計を考え就職組に・・・中央区にある大手印刷会社に入社。3年生の時に高校進学の補習授業が、Aクラス（成績上）とBクラスの2コースに分かれ始まる。就職組の補習授業はない、私は進学を迷っていたが、Aクラスの授業を受講した。最終進路を決めるときに、兄が進んだ道を踏襲する方向で・・・ただ、勉学志向が強かったので社内教育の充実した施設（技能者養成所）を持つ会社に就職を決める。此の頃、石川島播磨やキャノン等々いくつか選択肢があったが、学校推薦がないと試験を受けられなかった。石川島を希望したが選に漏れ、代わりに（株）日本光学を推薦される。初任給は確か6500円（この年大学卒初任給は、初めて大台に乗り10200円）。養成所社員30名募集に対し、200名を越す希望者が・・・幸い試験に合格、入社式には母親が来た。（家族参加が必須）

中学生からクラブ活動が始まる。私は、スポーツや音楽・芸術関係が不得手のため、自然科学クラブに入部する。このクラブで、「ひよこの栄養実験」と言うテーマで活動が始まった。食べ物によって、生き物の成長がどう変わるか？栄養を、糠・野菜・魚粉・水として、①標準②糠不足③野菜不足④たんばく増量⑤カルシウム不足の5分類に分け、1ヶ月飼育後体重を測定。①19.4g ②100.3g ③139.4 ④165.9g ⑤114.2g・・・この結果、糠不足が成長に障害があり、たんばく質が成長に大きな影響を与える結論を得た。この活動は、授業を受けながら、分担して朝・昼・夜と給餌や散歩・防寒等大変楽しかったことを覚え

ており、読売新聞主催の学生科学賞の優秀賞を受賞したのがいい記念になった。この学校では、前期中期後期毎に学年毎（300人）の試験が行われ、上位50人までが公開された。自然科学クラブで実験を行ったグループ7人組を結成した仲間では、全員が公開された中に入る。私は、常時30人以内で10番以内に入った事もあった。

この時代は、最近の映画（3丁目の夕陽）でも話題になった時代です。東京タワーが完成し、太陽族が流行り、フラフープやミニカー、金の卵と言われた低年齢の集団就職が始まるのも此の頃。

1960年に締結された安保条約・・・これら条約には、安全保障だけでなくアメリカの安い農業生産物を輸入？多くの農村が安い農産物輸入により生活出来ず、若い労働人口が都会に流れていく現象が生まれたのもこの時期です。日本経済の高度成長は、地方から集団就職で上京した、少年たちが京浜工業地帯や東部の零細工業地帯で、大企業の下請けとして大きな寄与をしたと言われています。数年前、NHKの朝ドラで描かれた「ひよっこ」等もこの時代かな・・・？

この年（1959年）から始まった修学旅行専用列車（ひので・きぼう）で、京都へ・・・初めて関西旅行、京都の専用旅館で泊まり。金閣・銀閣・三十三間堂・清水寺・竜安寺・・・等々、修学旅行を満喫した。

校歌の歌詞から、学校の雰囲気を感じてください
い・・・！

台東区立蓬萊中学校校歌

あさくさの 隅田のほとり そびえ立つ
われらまなびや 高まどに

清風吹けば うるはしの
学問の心 日に進み 月に果なし
つとめ守らむ われらが誓い

その名もゆかし 名はゆかし

ふるさとは 緑もえ立ち 人和む

蓬萊の園 みゆかりの

さきくひそめば あたらしき

憲も称えて われひとも 栄えて明るし

つとめ究めむ われらが誇り

その名もうれし 名はうれし

末広の葉かげ 幾ひら 睦み合う

銀杏の校章 かがやきて

われら光せば たぐひなき

理知のひかりの 頭に胸に いよまみちみつ

つとめ伸さむ われらが力

まだまだ純真で初心な少年は、これからの社会で勉強し頑張つて働き、いずれは立派な社会のリーダーを目指すと言う希望に満ちて旅立ったのです
が・・・？



風のことば絵同好会

【常陸国における親鸞の足跡】(9)

爪書阿弥陀堂(石岡市高浜)

話は、親鸞が高浜の岸から霞ヶ浦を舟に乗り、鹿島神宮へよく通っていた時の話です。

この地に「腫れもの」で悩む一人の男がおり、親鸞が介抱すると腫れものもなくなり、痛みも無くなってしまった。



爪書阿弥陀堂(石岡市高浜)

感激した男が、親鸞に未来の禍いも取り除いてほしいと懇願すると、「庭の石には阿弥陀如来が宿っているのです、それを信心するが良い」と言っ去って行った。

男が庭石を調べてみると、うっすらと爪で書かれた阿弥陀如来の姿が浮き彫りになっていた。

そして、阿弥陀堂を建立して代々守ってきたというのである。

もう一つは小美玉市にある「喜八阿弥陀」です。



喜八阿弥陀(小美玉市与沢)

さて、こちらの話は与沢地区に住む豪族の長島喜八の妻が三人目の子をみごもった時、難産のために亡くなってしまったのです。

そしてその妻が夜な夜な枕元に現れ夜も寝られなくなつたという。

この時に近くを通りかかった親鸞上人をお招きして、亡き妻の霊を静めてもらった。

妻の霊を静めた場所が経塚として残され、長嶋家には親鸞の書いたとされる絵画が三幅残されている。

この絵画は県指定の有形文化財とされ、今でも長嶋家個人の所有となっている。さて、真贋の程ははかりかねるが、ほんとうであれば、個人の所有は如何なものかという気もします。

二つの話は似ているようだがかなり違う。高浜は「腫れもの」であり、キリスト教などにも出てくるライ病を連想させる。

腫れ物と言えば、小町伝説で、石岡の北向観音にお参りした時の病も腫れ物だったように思う。

一方喜八の方は妻の亡霊である。これは親鸞が幽霊を静めるのに長い間通い詰めたとされる銚田市にある「無量寿寺」とも関係があるのかもしれない。

ともかく、与沢は石岡と鹿島方面の海とを結ぶ街道の拠点であった。

塩が運ばれた道でもあったという。

親鸞聖人の御経塚

経塚(きょうづか)とは一般には、仏教の経典を筒などに入れて、土の中に埋めた場所を言うといえます。

それはまた、末法思想が流行った時に経典の紛失を恐れて始まったといわれています。しかし、こ

こ石岡地区に残されたこれとは少し形の違う経塚という場所が2か所あります。いずれも親鸞上人に関係しているのですが、1か所は「喜八阿弥陀」に係る「経塚」です。



小川町（小美玉市）指定 経塚

「今から600年の昔、一男一女を残して難産で死亡した、長島喜八の妻が毎夜霊となつて、夫喜八の枕辺に現われ、子の養育をしきりに訴えるので、喜八は親鸞聖人往来の時、聖人に御化導をお願いした。聖人は浄土三部妙典を小石に書き写して塚に埋めさせた。それ以降は霊は現れなくなったという。」

場所は小美玉市与沢地区で、難産で亡くなった喜八の妻の霊を静めるために、親鸞上人が經典の梵字を小石に一字ずつ書いてそれを塚に埋めさせたところだといひます。

それ以来霊が現れなくなつたと伝えられています。

もう一か所は石岡市貝地の高浜街道沿いにあります。「茨城の地名発祥の地」の看板のほんの少し手前です。



府中経塚(石岡市小目代)

現地には説明看板はありません。ここにも「聖跡御経塚」と記されています。ネットで調べてみると内容を紹介しているものを発見しました。

茨石通信「わくわく通信」2010年12月号の「わくわくふるさと紀行」の記事です。その概要は「その昔、文字の書かれた小石がザクザクと出てくる畑があり、「府中経塚」と呼ばれていました。その場所は、石岡市の小目代で、ここに親鸞聖人の伝説が残されていたのです。その昔この近くに農家があり、その嫁さんが親鸞聖人の教えを

受けて、毎晩講中に出かけていました。あまりにも続くので、その舅は嫁に男ができたものと早合点して、ついには言い争いになり、挙句の果てには、刀で嫁を袈裟がけに切りつけました。からくも一命を取り留めましたが、その傷がもとで後に亡くなりました。

その後、不吉なことがいくつも続くようになり、ある時に嫁が信仰していた名号「南無不可思議光如来」の掛け軸を開いてみると、掛け軸は見事に袈裟がけに切れていたといひます。

それが今、本浄寺の寺宝として伝わる掛け軸「袈裟懸け名号」です。

（この話は水戸河和田の報佛寺の十字名号の話とかなり似ています）

また、江戸時代後期、春の日に巡礼がやって来て、経塚から経石を掘り出し持ち帰りました。

それを知った農夫たちも石を掘るようになりました。領主がそれを聞き、みだりに掘ることを禁じました。

大正時代になり、街道の道路改修工事が行われ、この経塚が道路にかかることが分かり、この遺跡を新道の脇に移すこととなり、「親鸞聖人御旧蹟」と刻まれた大きな石碑が建てられました。

右には「聖跡御経塚」、左には「聖徳太子尊」、中央の前には小さな石が置かれ、仏説無量寿経が記されています。

建設には、本浄寺のほか9カ寺、400名近くの信徒たちが名を連ね、大正14年2月1日の完成

だといひます。」となつています。

経塚は最初の方に書いたように経典を埋めたところが多いようですが、このように「阿弥陀経・無量寿経・観無量寿経」の全二万六千六百字あまりを、小石に一字ずつ書いて埋めることも行なわれていたのです。

一字一石経と呼ばれているようです。

如来寺（石岡市柿岡）

関東には24輩という親鸞の弟子が建てた寺があるが、天台宗などに比べどこも派手さはない。

石岡にこの24輩の第四番 乗然房領海の建てた「如来寺」がある。

場所は柿岡の市内中心部に近い。



柿岡の中心地にあるが、古ぼけた山門が残されている。

この如来寺には聖徳太子の浮足の像という木像が残されていて、親鸞は師としては法然と聖徳太子を崇拝していたという。

もともと自ら宗派を興すつもりもなかったというが、後に弟子たちが宗派を興し、またいろいろな会派もできている。

注目すべきは、この如来寺が元は霞ヶ浦湖畔の美浦村木原にあったという。霞ヶ浦からは光り輝く如来様などがみつかつたという言い伝えなどがいくつか残されており、ここにも似た伝えがあるという。

美浦村木原は現在のテキサスインスツルメントがある場所に近い。

また、面白いことに石岡では「茨城」のなまへの起こりとなつたとされる「黒坂命（くろさかのみこと）」が、北の方（十王町）まで攻めていき堅破山（たつわれさん）で亡くなり、黒前神社に祀られているが、「死んだら霞ヶ浦の見える美浦の地へ葬つてほしい」と言い残していたため、遺体は「輪輻車」（霊柩車）で黒前山から美浦に運ばれたという。（美浦村に残された話）

葬送は赤や青などの旗がひるがえり、雲が飛ぶように見えたり虹が輝くように見えたという。当時の人はその様子を「幡垂（はだしで）の国」と呼んだ。

後に美浦村の地を「信太（垂・しで）の国」というようになったというのである。

黒坂命の墓とされる古墳が大塚地区にあり、弁天

塚古墳と呼ばれる。

木原・大塚・陸平（貝塚）などと続いており、古代が意外な形でつながっている。



風のこぼ絵同好会

弱肉強食

伊東弓子

若い日、保育講習会の時、科学者でもあり、佛教徒でもある住職のお話しに感動し忘れることこの年までできた。

“自然の姿も正にそうだ。その中で生きている生物すべてが、自分の種族を守るために生き方を工夫している。人間は数が多くなつて社会の維持が不安化していくと、必ず戦争を起していく”との話しだった。飢餓に苦しみ、病気の流行で倒れ、発達と共に交通事故から交通戦争という言葉も生まれ、巨大化し、各地域で起きていたいざこざは世界中を巻き込んで戦争となつていく。科学の発達は宇宙まで支配しようとする人間の欲望でやがて宇宙戦争などの想像も生まれている。どうなっていくことか。

あの感動の日から長い月日を過ごしてきた私は何をしてきたかと、最近の病気の流行、世界で起

きている戦い、日常生活での苦痛を抱える状況を逃げることなく強い意志で対処してきたつもりだが大したことは出来ていない。貧しい者同士、弱い者同士、助け合うよりも突っつき合つて生きていくことが多い。

今の日常生活ばかりではなく、大分前に読んだ古文書の中にも本家と分家についての約束事があったの思い出した。

一、本家と分家の弁えをはつきりさせること。

一、早寝早起きし野良仕事に精進すること。

一、武芸、音曲などは慎むべし。

一、一日本家に事あれば、何をおいても馳せ散じらるべし。

一、本家から分け与えられたものは、減らすこと、増やすことなく守るべし。

こういった人と人を縛り支配していくものだった。今はどう思うが如何して如何して根強く残っている話をよく聞く。

それは、私がふらふらと出かけた知らない地区を歩いていた時のことだった。山道を暫く行くと小高い所に小さな軒家を見つけた。それは奇妙な形だった。藁屋には草が生え小さな草花も咲いていた。みずばらしいというよりも物語りの世界を見るような思いだった。壁、戸もなく柱だけが風雨に晒され筋くれだっていた。いや床も化けてよくよく痛み落ち込んでいる所もあった。床下は草、篠が生茂っていたし、家の回りも枯れ果て、新しい草が芽を出し、何年も繰り返された様子がわかる。見るも意味ありげな様子を私に語りかけられるかの様に風が過ぎていくのを感じた。近くに

置いてあったのか傾き倒れかけていた。家の前から下る道もあちこち崩れ土止めの杭も朽ちていた。どんな人が住んでいたのだろう。その人達の人生は幸せだったろうかと、思いを膨らませながら山を降りて行くと疎だけれど人家があった。通り沿いの庭先で豆むきをしていた老婆と話しが弾んだ。あの家の話しになると、思い口を開き、聞くも哀れな出来事が語られ始まった。

本家は人を多く使い手広く猟をしていた。下の方の弟が分家してきたのがこの家の二代前の男だったという。この前、死んだ男は三代目になる。両親が早く亡くなったので開墾のし直しのようなもの、家の廻りのありとあらゆる所を耕し、種を播き、苗を植えていったが、鳥が突っつき、狸が喰い散らし・・・となかなか上手くいかなかった。山間の湿地を耕し、稲苗の残りを貰って植えたりして困難にめげずに頑張っていた。嫁をもらって・・・と男は人生の目標を立てて張り切っていたようだが、上手くいくより失敗の連続だった。本家からの呼び出しがあれば往々にして一日汗を流していた。少しの米でも野菜でも、残り物でも貰い物は有難かった。一人であっても毎食をむかえるのは大変なことだった。朝食べる物があれば、昼は、昼が過ぎると夜は、翌朝はと、食べるもの、食べるものが頭から離れない。気の休めない毎日だった。山を走り回って鳥を追い、兎を追った。川辺も暗に乗じて魚を捕り、悪いこともやったと言っていた。木々の実、草の実も筆り取った。そうこうしていた生活の中で山間の畑で草取りをしている女に会った。毎日のようにその畑まで行くのが日課のようになった。いくら声をかけても返事はなかった。その娘は耳が遠いせいか話

しが出来なかった。ただただ優しい眼差しが語りかけている様子がよくわかった。二人はいつしか心通わせるようになり、将来一緒になつても思いはせるようになっていた。

毎日毎日山を走り、畑に向かったが、出会うのが当たり前ではなかった。少しでも近づきたい思いから細い道を行つてみた。傾斜地はなく平らな畑、そして田が続いている。家数も多く自分の所とはおおよそ違う世界に見えた。野良仕事が忙しくなると、本家に毎日行くようになった。恋しさが募つて本家に行く前に寄り道することにして早目に家を出た日もあった。『いた！』思わず大声をあげ、両手を大きく振つたが聞こえない。近くに行つて肩を抱えていた。喜びの表情で受け止めてくれた。本家に話すと大反対だったが、娘の家へ根気よく行って話しはまとまっていた。しかし大反対された本家、親戚から孤立していったのはいうまでもない。今後出入りは一切禁止となった。

二人は一生懸命生きようとしていた。男の子が産れ、母親となつて健気な姿で日を送っていたところへ、本家から無理難題をつきつけられた。誕生近く歩き出し始めた可愛いさかりの子を本家に孫がないから、「子供を出せ」ということだった。悩む間もなく筆り取るように、泣き叫ぶ児を連れて行かれた夫婦は失望のどん底に落ち込んだ。女は半狂乱になった。男の献身的な支えと、実家の親の力づけで、日が経つにつれて落ちついていった。活気を少しづつ取り戻した生活に二番目の子の誕生は大きな喜びだった。今までの苦労や悲しみも無かったかのように穏やかな日が続いた。男が仕事の都合で三日泊まりで留守になった。妻と赤子をおいていく不安に心ある人(実家、一番近

私が話しをしているお婆さん宅に話して出かけて行ったという。二日の昼下がりで大声がした。爺さんに頼んだ。爺さんも今よりもずっと若かった。棒を持って丘を登って行くと、赤子が火がついたように泣いている。男が女を手込めにしていったそうだ。爺さんは持っていた棒を振り回し走った。もう二人の男は用をすませた後らしく禪一つで囃子たてていた。胸騒ぎがするので早めに来た父親は農具を振り回し二人にかかっていった。半殺しにした男を縛り上げ、投げ散らかっていた服を持って駐在所まで行ってくれた。実家から来た婆さんは赤児を私に抱かせ、裸の娘の体を拭いて服を着せていた。男が帰ってくる次の日待つつかのように息を引取ったよと、聞かせてくれた。話の後、もう一度その場へ行って手を合わせて戻った。

男は夕方になると隣の灯りに誘われて出て行くようになった。そして家具が一つずつ無くなっていったそうだ。たきぎになったり、酒代に変わったりしていったのだろうか。そしてある年の寒い朝、自転車と一緒に田の中に倒れて死んでいたという。

強い者は弱い者を喰っていますか
弱いものは強いものに喰われていますか。



風のことば絵同好会

加波山神社(真壁拝殿)

小林幸枝

茨城県桜川市にある加波山神社を紹介します。茨城県内でも有名な筑波山の隣にある加波山に鎮座する神社です。加波山神社と一言で言っても加波山三枝祇神社本宮、加波山神社真壁拝殿、加波山神社八郷拝殿に分かれています。加波山神社に向かいの駐車場に車を停めると、真壁拝殿の大きな看板が見えます。鳥居の色は朱色で綺麗です。鳥居の手前に狛犬がいます。玉乗りに手を乗せていると思ったら、子狛犬？に手が乗っていてビックリしました。珍しい？！



屋根に金のシヤチホコがあり、手水舎の隣に龍が巻き付いている鳥居があり、大変美しいです。



鳥居をくぐった先にある拝殿は、豪華で立派な造

りをしていて綺麗な色が塗られ、飾りも派手な拝殿だと感じました。

上を見上げると虎と龍が向かい合っている彫刻がありました。立派な灯籠もありました。龍と12干支の彫刻がありました。一番上にいるのは鳥でした。よく見たらこの鳥は鳩でした。銀の天狗のお面も飾られています。天女など色付け、飾りがとても美しかったです。天女を見たら、まるで生きているように見えました。

風と共に 《理》(25)

大輪啓展

毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。
今月のテーマは、「価値観」

ここ最近の気候は常軌を逸してますね、毎年夏になると夏が近づいてくると、毎年こんなに暑かったかなと、ですが、今年は異常に暑いと感じます。

コロナも定期的に変異して、爆発的にその数を増やしています。
熱中症やコロナ感染、皆さんもしっかりと予防手段をとっていきましょう。

さて、今回は価値観をテーマに私独自の視点から、お話しさせていただきます。

皆さんの日常、様々なカテゴリーの中で、自身自身の気に入った物、事、趣味・趣向があると思

似たような価値観を持つていると、自然とその様な人達が集まり一つのコミュニティへと発展したり、人との関わりの中ではとても重要な要素となります。

人の個性が無限にある様に、価値観もそれに伴い無限に存在する筈です。

例えば、音楽と言つても色んなジャンルがあり、ジャンルの中でも色んな歌手・楽器・作詞・作曲と、一つの分野で見ても数千、数万の組み合わせで自分の好みがある筈です、仮に一つの分野で全く同じ思考を持つ2人がいたとして、その他のジャンル全てに於いてピッタリと一致するなんて事は、おそらく天文学的数字になるのではないのでしょうか。

24の「個性」の中でも触れましたが、1人1人違うんですね、ましてやその価値観を仲が良いからと押し付けてはなりません、仲が良いからこそお互いの価値観を認め合い、そこから新たな気付きを得られると共に、自信の新たな価値観へと変化する事でしょう。

それぞれの価値観は、一体どの様に形成されて行くのでしょうか。大抵は、新しい信頼出来る人の影響は少なからずある事でしょう。

それ以外では、直感に近い様な感覚で、それに対してほぼ無意識に行動しているのではないのでしょうか。

近く親しい人には、同じ感覚を持って欲しいと

考える事も多いでしょうから、行動を共にする人とは、ある程度の似たような価値観を持つてもらうために、知らずとその価値観に対するプレゼンテーション、家族、恋人、友達、同僚等に行っているのではないのでしょうか。

コミュニケーションなど、今時の方々は人と接する事に不慣れな人、上手く自分の感情や行動を他に伝える事が困難な人達の総称としてつけていますが、誰であつても初めから人と接する事が上手い訳ではありません。

話し上手、聞き上手と言われる人達であつても、最初から上手に出来る人はいません、今はともすれば、変なカテゴリーに自分を自ら分類し、苦手な事に対して出来ないことが当たり前の様に、努力もせず人を羨むのみで、ただ逃げているだけだと感じます。

「皆あなたの様に出来る訳では無いのだから」
勿論向き不向きはありますよ、ただ、努力をした上での話なのか、漠然とそう感じるからなのかでは、全く違う物となつてしまいます。

あなたの様にと言われてる人達は、言ってる側からは分からない、ひたむきな努力と諦めない心を持って、痛みや悲しみという負の感情を乗り越えて来たからこそ今の今なのです。

努力等諦めている人達に、その様な言葉をかける資格はありません。

全ての事において、自分の価値観に自信を持つ

ている人は、根拠のない人を除き一様にそれなりの努力を重ねているのです。

自分の価値観をしっかりと持つこと、ある分野においては根拠となる努力をする事、それぞれの価値観を押し付けない、強制しない、そして認め合う事。

人は貶めるより、認めて学んだり、お互いを尊重し合う方が全てに於いてプラスになるのに、一つ一つの前にあるのに勿体ないと思うばかりです。

自分で気が付かなかった世界にもしも足を踏み入れる事が出来て、その世界が自分の望む世界であつた時、人はまた一つ成長できるでしょう。

そんな考えには及ばなかった、その様な物の見方もあつたんだ、自分の為になる事はごく身近に潜んでいます。

そこに気がつくのも気がつかないのも、全て自分にかかっています。

天才と凡人の差は、人が気がつける所に、目を向けられるのか、意識を向けられるのかの、ほんの僅かな事の繰り返しです。

積みも積もった根拠がその後の人生に大きな力となるのです。

全ての事象に対して、私はずっと言い続けています。

僅かな努力を惜しむ事が一生を決めるのだと。ですから、価値観を成長させていきましょう、それではまた。

茨城県の難読地名とその由来(26)

常陸国風土記と地名

木村 進

西暦713年から721年にかけて編纂された常陸国風土記は時の最高権力者であった右大臣・藤原不比等(ふひと)の三男の藤原宇合(うまかい)が常陸国国守であった時に、部下の高橋虫麻呂と共に取りまとめたといわれています。

奈良時代の初めに元明天皇(げんめいてんのう)が大和朝廷支配下の各国に対して、地方の文化風土や地勢等を国ごとに記録編纂して天皇に献上させたものですが、現存している風土記としては、『出雲国風土記』がほぼ完本、『播磨国風土記』、『肥前国風土記』、『常陸国風土記』、『豊後国風土記』が一部欠損していますが残されています。「常陸国風土記」はその中の一つで、東海道の最北の国でした。

そこには当時の古老から聞き取った話や、地名由来が書かれており、時の権力者の考え方も見えます。しかし、地名などに関しては、その多くが当時の伝承であり、必ずしも真実とはとても思われぬ内容も多く含まれています。それをどのように読み解くかは、専門家でもかなり難しいでしょう。

ここでは茨城県の難読地名を理解するヒントになると考えて、この常陸国風土記に書かれている地名に関する内容を書きだしてみたいと思います。

(一) 常陸(ひたち)

昔は、相模の国の足柄の坂より東はすべて、「吾妻の国」といい、新治(にひばり)・筑波(つくは)・茨城(うばらき)・那賀(なか)・久慈(くじ)・多珂(たか)の小国には、朝廷より造(みやつこ)・別(わけ)が派遣されていた。まだ常陸という国はなかった。後に、孝徳天皇の時代に足柄の坂より東を八国に分け、その一つが常陸の国となった。

「常陸」の名前の由来は

(1)、行き来するのに、湖を渡ることもなく、また郷々の境界の道も、山川の形に沿って続いているので、まっすぐ行ける道、つまり「直通(ひたちみち)」といふことから、「ひたち」の名がついた。

(2)、倭武の天皇(やまとたける)が、東の夷の国を巡ったとき、新治の県(あがた)を過ぎるころ、国造のひならすの命に、新しい井戸を掘らせるところ、新しい清き泉が流れ出た。輿をとどめて、水を褒め、手を洗おうとすると、衣の袖が垂れて泉に浸った。袖をひたしたことから、「ひたち」の国の名となった。

と2つの名前伝承が書かれています。

(2)についてはあくまでも伝承ですが、(1)の説を歴史書や各種書物などでも多くが取り上げています。しかし、その他の解釈もたくさん存在しています。

(1)の解釈として、まだ大和朝廷による律令制が行われていた時は、その勢力範囲はこの常陸国が最北で、その先の東北地方はまだ蝦夷地でした。

この東北地方と接する常陸国は、東北地方を「道奥(みちのおく)の国」と言っていたときは、常陸国までが中央朝廷にとって道が続いていたところであり、直道(ひたみち)と書いていたが、東北地方を「陸奥(みちのく)(むつ)」と書くようになって、直道 ↓ 常陸となったというように多くの文件で解釈されています。

確かに、この常陸国は平野が続く広々と、ここに入るまでは湖や山もありますが、この国に入ると真っ直ぐ道が続いているといつてよいでしょう。

その他の名前の由来もたくさんありますが、ここではこの風土記の記述を記すだけでとどめたいと思います。

(二) 新治(にいはり、にひばり)

「新治郡」の郡衙は旧協和町(現筑西市)古郡(ふるこおり)あたりにありました。

★新治(にいはり)の名前

新治の国造の祖先となったひならすの命を遣はした。

ひならすの命がこの地で新しい井戸を掘ると、清き水が流れ出た。

新しい井を治(は)ったことから、新治の名がついた。

★笠間(かさま)

郡家より東五十里のところ、笠間の村がある。

★葦穂山(あしほやま)

郡家より笠間に行くときに越える。昔は「小初瀬山(おはつせやま)」と言った。

(註：平安時代の10世紀初めに醍醐天皇が足尾神社を置き、足尾山に変更された)

〈新治の読みについて〉

平安時代の辞書『和名類聚抄』には「爾比波里(にひはり)」とあり、

『古事記』にある倭建命(やまとたけるのみこと)の歌に「邇比婆利(にひばり)」とある。

・・・新治(にひばり)筑波(つくは)を過ぎて幾夜か寝つる

(原文：邇比婆理 都久波袁須疑豆 伊久用加泥都流)

【参考】 日本各地の新治地名

茨城県筑西市新治 にいはいり

茨城県かすみがうら市新治 にいはいり

神奈川県横浜市緑区新治町 にいはいるちよう

滋賀県甲賀市甲南町新治 しんじ

京都府京丹後市峰山町新治 にいばり

福岡県うきは市吉井町新治 にいはる

大分県日田市新治町 にいばるまち

群馬県には新治(ニイハル)村(現みなかみ町)がある。

古代の新治郡と現在の新治地名には場所がかなり

移り変わっています。

(三) 筑波(つくば、つくは)

筑波の県(あがた)は、昔、紀(き)の国といった。

美麻貴の天皇(崇神天皇)の御世に、采女臣の一

族が、筑篁命(つくはのみこと)を、この紀国の

国造として派遣した。

筑篁命は「自分の名を国の名に付けて、後の世に

伝へたい」といって、旧名の紀国を筑篁国と改め、

さらに文字を「筑波」とした。とあります。

これによると 筑波は「紀の国」といったが、遣

わされた国造の筑篁命が自分の名前を残したくて

「筑篁」とし、文字を変えて「筑波」としたということになる。

筑篁を「つくは」と読むかどうかは怪しいが、「篁」

は篁筥(たんす)のタンであり、訓読みなら「ハ

コ」となるだろう。

また国造(くにのみやつこ)として派遣された

とされる「筑篁命」は、3〜4世紀初め頃の崇神天

皇の時代に派遣された人物ではないかと考えられて

います。

さらに「紀の国」というと紀州和歌山を思い浮か

べますが、「紀」は、柵または城に由来することば

で、大和朝廷が対蝦夷を攻めていたときにその最

前線に置かれた軍事基地を意味するものと考えら

れます。

この風土記に書かれている筑波の地名由来も、地

名が先にあつて、あとから考えたものかもしれま

せん。実際に、筑波の地名由来はいろいろな説が

あります。

昔から人の名前はその人が住んでいた地名から呼

ばれる場合がほとんどで、人の名前から地名にな

るものは少ないと思われます。もちろんある所に

住んでいた豪族がその土地の名前で呼ばれていて

その部族が別な地に移って名前を変えずに、その

新たに開拓した地がその人の名前と同じになると

いうことはいくつか例があります。

さて、筑波山ですが、当時は

「西の頂は、高く険しく、雄をの神(男体山)と

いって登ることは出来ない。

東の頂(女体山)は、四方が岩山で昇り降りはや

はり険しいが、道の傍らには泉が多く、夏冬絶え

ず湧き出てゐる。」

とされ、女体山では男女が山に登り、歌垣で歌を詠み楽しんでいたことが書かれています。

現在の「つくば市」周辺は「河内郡」ですが、風

土記には「河内郡」の記載はありません。

(続く)



風のことば絵同好会

【風の談話室】 《読者投稿》

やさそ暮らし (66)

さと女

・梅雨入りも梅雨明けも、以上に早かった今年

・・・？梅雨明け後、雨模様の日が長く続く？

何と無く気象庁の発表に違和感が・・・？

その後、あの梅雨入り梅雨明けは可笑しい

(間違いでは・・・？)・・・と。

・今日も暑かったなあ・・・田圃の畔で一休み、

遠いふるさとの家族の事でも語っているのか

な・・・？ 擦れ違うと、片言で「コンニチハ・・・

”と挨拶を交わす。 国は違っても、ココロは通

う・・・！

・我が家の主、今日もセッセと池通い・・・？

いつの間にかネコさん5ひき、この時だけはすり寄って来ます。今日は美味しい魚いただけるかな？

・昨日は園部公民館主催の歴史探索・・・石岡市のラッピングバス2台で、常陸太田市方面へ。水戸光圀公が隠居後10年を過ごした西山荘。鎌倉時代から江戸時代にかけて常陸の国を支配した、佐竹氏代々の祈願所である佐竹寺を見学。現地のボランティアガイドさんが丁寧に説明・・・400年も前の歴史に触れる事が出来た。帰りには、道の駅ひたちおおたに寄り買い物満喫、大いに楽しみ無事帰途についた。

・春に種蒔きしたベニバナが開花した。こんこんギヤラリーのメンバーNさんのベニバナ畑です。赤や黄色に彩られ花摘み頃になった。今朝は花摘み乙女の仲間入り。なんか、しあわせ気分。帰りに素敵なベニバナの花束を頂く・・・。

・父が大事にしていた樹齢30年程の「枝垂れハナモモの木」・・・長い間頑張っていたのに、とうとうその寿命を真っ当してしまった。今年の春も綺麗な、紅白の花を咲かせ楽しませてくれたのですが？主幹の途中からパツクリと割れてしまった。98才まで頑張った父と同じように、最後まで庭のシンボルとして、わが家を、家族を見守ってくれた。幸いなことにハナモモから落ちた種から育った苗が育ちそうなので、これからはこの新たな苗に、見守って貰いましょう。

・それにしても熱い、この熱さは年寄りに応え

る・・・。午前中で作業は中止、早々とシャワーを浴び、汗を流す・・・！そしてクーラーの冷風を浴びる・・・！(ごくらく)ごくらく・・・。

石岡地方のよもやま話

木村 進

(15) 弁円懺悔の地

親鸞は越後での流罪が許されたのち、師・法然の提唱した浄土教(浄土往生)の布教のために常陸国にやってきました。

そして小島草庵(下妻市)をへて、稲田草庵(現笠間市稲田 西念寺)で、常陸国各地の布教や、親鸞自らの経典『教行信証』をまとめたといわれています。

1214年から1235年頃までの約20年間、常陸国に暮らしたとされていますが、その多くがこの稲田草庵でした。

当時(鎌倉時代初期)、東国では山伏などの修行念仏僧などによる布教が各地で行われていました。また当時、仏教の経典などはこのあたりでは「鹿島神宮」に多くが集まっていました。

このため、稲田から鹿島神宮などには頻繁に通っていたのです。稲田から鹿島神宮に行くには、板敷峠を越えて府中(石岡)を通り、高浜から舟に乗っていくのが最短ルートです。

もちろん陸路(霞ヶ浦の北岸など)も通っていました。

親鸞はまた村々の辻などでも教えを伝えていて、徐々にその教えに信者が増えていきました。そして親鸞の評判がいろいろなところで聞かれる

ようになったのです。

これが面白くなかったのは、今までこの地で布教活動や講を行って、信者を獲得していた山伏たちです。

その山伏の長であった弁円は日増しに名声が高まっていく親鸞を妬ましく思い、いつもの通り道である板敷峠のすぐ上に「護摩壇」を焚いて、親鸞を呪い殺そうとします。

またもしこの道を親鸞が通ったら襲って殺そうと待ち伏せしました。

しかし、待てど暮らせど親鸞がやってこないのです。仲間を集めて稲田の草庵へ押しかけましたのです。殺そうと思っただけでやってきた弁円を優しく諭した親鸞のその教えと人柄に弁円は会心し、親鸞の弟子となります。

東国における親鸞の弟子は24人で、二十四輩と言われており、弁円はその中の「明法房」です。

親鸞の弟子になった弁円(明法房)は親鸞について歩き、布教の手伝いや、各地で自ら親鸞の教えを広めるために活動しました。

そしてしばらくたつたある日、弁円は親鸞聖人と板敷峠を越えて現在の大覚寺のあるところへ降りてきたのです。

久しぶりに板敷峠を通った弁円は、かつてここで親鸞を襲おうと待っていたことを思いだし、ハラハラと涙をこぼしたといわれています。

そして詠んだ歌が、
歌：「山も山 道も昔にかわらねど
変わり果てたるわが心かな」

この地に「山伏弁円懺悔の地」と彫られた石碑にこの歌が彫られています。

この場所は昔の板敷峠越えの道のため、現在は通る人も少なく、草が生い茂ったりしていますが、石岡では忘れてほしくない場所です。



山伏弁円懺悔の地の石碑

また、稲田の草庵と言われたところには「西念寺」という寺が残されておりですが、この寺にも弁円の歌が書かれた碑があります。そこには、弁円詠歌として

「あだとなりし弓矢も今は投げ捨てて

西に入るさの山の端の月」

「山もやま道も昔に変わらねど

変わりはてたるわがこころかな」

の2つの歌が載っています。



護摩壇跡（板敷山）

また板敷山にはこの弁円の「護摩壇跡」が残されています。

(16) 府中の祇園まつり

石岡のおまつりは常陸国総社宮の例大祭の行事であるという。

しかし、江戸時代には総社宮でこのような祭りは行われていなかった。

この話はまた別な機会とするが、今回は旧石岡の市街地（府中）にて行われていた祇園まつりについて記録を調べて残しておきたいと思えます。

江戸時代には各地に天王社と呼ばれる社が数多く存在しました。

この社ではインドの祇園精舎の守護神といわれている牛頭天王（ごずてんのう）を祀っています。

また、インドの神ですので神社でなくお寺に分類されていました。

このインドの神は朝鮮半島から対馬を経由して日本にはいつてきたのですが、愛知県津島市に総本山（天王社、現在の津島神社）ができ、現在も全国に3000社も分社があるのです。

当然牛頭天皇はインドの祇園精舎の守護神ですから、この天王社の祭りは「祇園まつり」と呼ばれています。

京都の八坂神社の祇園まつりも、神社の祭神がスサノオノミコトとなつてはいますがルーツは同じです。

江戸時代に東国ではこの天王社の夏のお祭り（祇園まつり）が各地の庶民の間で争うように行われてきました。

ここ府中でもこの天王社が中町の矢口本陣の近くにありました。

この祭りも宝暦から明和期（1751年～1772年）の江戸中期の頃がもっとも盛んであったようで、府中の町の各町が出し物を出して、町を練り歩いたといわれています。

この祭りは旧暦6月14日に行われていました。出し物は、

- 一番 富田のささら
- 二番 中町のやたいおどり
- 三番 香丸の子供おどり
- 四番 守木の子供おどり
- 五番 木之地のみろく（弥勒人形）
- 六番 泉町のふし
- 七番 幸町の田打おどり
- 八番 青木町のほうさい（泡斉・念仏踊り、ちえんちえんちえん 人形）
- 九番 若松町のかたかた
- 十番 中之内のほろ
- 十一番 金丸の人ささら

（石岡市史 下巻より）

となつていたと記録にはありますが、実際にどのようなものだったのかは多くのところが踏襲されていないためにわからなくなっています。

富田のささらは今の祭りでも先頭で、これを明治35年に総社の祭りとして復活させたのが今の「石岡のおまつり」です。

もともと総社宮では例大祭と相撲などが行われていただけで、祇園祭などは行われていませんでしたので、この祭りが八坂神社などで行われている「祇園祭」と同じだとすると少しおかしく感じるかもしれませんね。



木之地のみろく
(わずかに残された人形から復活したもの)

また、この天王社の祇園祭に加えて、木之地町の愛宕神社のお祭りが7月2日に行われていました。この2つの祭りも続くために財政的には各町が厳しくなり、江戸の終わり頃には隔年でやったりしていたようです。明治になり廃仏毀釈で天王社は八坂神社に名称を変え、存続していましたが、天狗党の乱、明治維新の混乱期で祭りは立ち消え、神社もいつの間にか姿を消し、この八坂神社(天王社)は総社宮に合祀されました。



富田のささら
(三匹の獅子人形 棒を操って踊る。棒ささら)

人がかぶって踊るのが人ささらだがこの獅子は棒ささらである。ヤタガラスのマークをつけていて、行列を先導する。

下士官の手記 5 燕石(えんせき)

(先月号からの続き)

大陸での日々 10 討伐

×月×日。

「大人、一緒に来てください。」

「村へ行くのか?」

「はい。」

「よからう。××、これから二人でB屯まで食料調達に行ってくる。後を頼む。」

モーゼルだけ持って馬で行く。林三等兵も馬だ。替え馬も引いてゆく。この頃は乗馬もうまくなった。

林三等兵の方がうまい。

背中に九九式小銃を背負っている。替え馬には擲弾筒も括り付けた。小隊規模の敵兵ならこれだけあれば十分だ。さらに、開発されたばかりの100式短小銃も一丁ある。これは、1分間に800発の小銃弾が撃てる。例の補給処から巻き上げた武器だ。ここらの匪賊が持っているのは、せいぜい旧式な機関銃程度だからこれで十分だろう。

後に、レイテ島に於て制式採用されたこの自動銃は、アメリカ兵を恐れさせた。米軍の持つ自動小銃よりはるかに多くの弾を発射できたからである。

試射では、一分間に800発撃てる。

アメリカ軍の物は、せいぜい600発だ。

×月×日

以前、二、三度近くの通信分掌が襲われたとき、擲弾筒五丁をもって、トラックで急行した。小隊のほぼ全員、50名である。分掌の裏側に回って、擲弾筒を打ち込んだ。小銃も発砲した。いずれも空砲である。驚いた敵兵は正面から逃げ出した。重機関銃がうなりをあげ、幾人かの敵兵がなぎ倒された。

「着剣、俺に続け。」

モーゼルを乱射しながら、分掌に突入した。このあたりの匪賊らしく、旧式の小銃と、赤い穂のついた槍ぐらいしか持っていない。人数は一〇〇人近く居たが、あっさり降伏した。数珠つなぎにして、駐屯地に戻る。

見物に現れた陸軍兵も、捕虜の数の多さにびびくりしていた。しばらくして、別な分掌が襲われた時は、トラックが近付き、部下を展開していると、白旗が上がった。「モーゼル將軍」と聞いて震

え上がってしまったらしい。

陸軍の連中は、

「俺たちよりよっぽど強いや。」

とあきれ顔だった。

つまらない武勇伝だが、まだこのころは相手の装備が貧弱すぎたのだ。B屯に着くと、大きな家に案内された。家族がそろって出迎える。

×月×日。

「相手は此処の娘なのです。」

招き入れられたところは、広い部屋で、テーブルに、家長とおぼしき人物と向かい合って座る。脇に控えている林三等兵に通訳させる。

「どうぞ召し上がってください。」

「招かれたわけでもない。謂われない接待は受けられないが。」

×月×日。

「今日は家の太姐の誕生日なのでお祝いして、客人を招いたのです。」

「日本の習慣ではこのような時、お祝いを持参するのだが、生憎何も聞いていないので、手ぶらなのだ。」

「モーゼル將軍に来ていただけるだけで光栄です。」

ざっとこういうやり取りだった。近くの対立する馬賊を攻めたいらしい。

壁にかかっているのは、李白の漢詩と、墨絵だった。

「この漢詩なら有名なので、私も知っている。

画題も中々いいけれど、新しすぎるようだ。」

「いや。お恥ずかしい、これは私が描いたものでして。」に「に」していう。

「絵のことはよくわからないけれど、漢詩の内

容とよく合っているように思う。」

「さき、一杯どうぞ。」

「では、この掛け軸に乾杯しましょう。」

「乾杯」

自分の書いた物をお世辞抜きで褒められたので、すっかり嬉しくなってしまうらしい。合図をすると、衝立の陰から次々に酒や肴が運ばれてくる。一人の娘だけやたらと着飾っている。これが例の娘らしい。

「お前もここに座って、俺の代わりに盃を受けろ、何しろ俺は酒が弱いからだから。」

主人は林の説明を聞いて大きくうなずく。一人の下女に庭を案内させる。このぐらゐの中国語は使えるようになっていた。東屋に行くと、下女たちに傳かれた老婆が座っていた。

「太太、ご長寿、お祝い申し上げます。」

「大人、こちらへおかけください。」

ついてきた下女が、何事か告げる。くだものや、菓子を薦められる。遠慮せず、ぱくついて、「うまい」という。老婆は目を細めて、

「日本の軍人は恐ろしいと聞いていたが、將軍はまだ若くて、まるで私の孫のようだ」という。

「私は將軍なんかではないし、国へ帰れば、ただの若僧ですよ。」

「でも、將軍は、何人もの命を助けた。その内の一人は、此処の使用人の息子なんですよ。」

「そうだったのか。」

「その者に代わってお礼します。」

母屋から別な下女が呼びに来た。

「太太にすっかり御馳走になってしまいましたよ。」

「大人、どうか義兄弟になってくれないか。」

「なにをいっているんだ。とんでもない。」

屋敷の構えからいって、この辺りの匪賊の頭目らしい。しきりに勧められて、「二杯飲んだが、強い酒なので、たちまち酔いが回ってしまった。」

「どうか泊って行ってください。」

「そうはいかない。任務がある。」

「同とか手を貸してもらいたい。」

「隊長殿、自分が戻って報告しておきますから、ここで休んでください。」と部下が言う。

正直、歩くのもおぼつかないので、とても馬には乗れないだろう。とはいっても留守にするわけにもいかない。考えた拳句、通信紙に、

「B屯の親目的な頭目と、周囲の地形偵察を行う。すくなくとも二、三週間はかかるだろう。連絡は、林三等兵に任せる。」

と書いて、頭目の配下に持たせる。書き終わると、猛烈な眠気が襲ってきた。

「ご主人、これで失礼する。」

と言ったまではかるうじて、覚えている。

×月×日

目覚めると、一瞬どこかわからなくなっていた。やたらに喉が渇く。蠟燭が一本燈つて、薄暗い。

おそらく真夜中だろう。辺りはしんと静まり返っている。下着姿で、柔らかい布団の上にいる。

母屋にもどると、頭目たちが待っていた。これから近くのA屯、C屯を攻略に行くという。

「いまから一緒に来て手伝ってくれ」という。

「自分勝手に行動はできない。」

「林は娘の婿になった。大人も一緒に来る。」

「しかたない。ごちそうになったし、付き合うか。」

「そうする。いいね。」

林の隣には、ぴつたりと若い娘が寄り添っている。

「林！」

「はい。」

「本日をもって、任務を離れ、此処の婿になつてよし。今日までご苦労であつた。」

「隊長殿！」

「もう、隊長ではない。××と呼べ。」

「・・・」

ぼろぼろ涙を流している。

「帝国軍人だったものが泣くんじやない。」

気持ちだからと、何枚かの紙幣を手渡す。

「それにしてもうらやましいぞ。林。」

表の広い庭には、武装した男たちが4,50人ほど整列している。先頭の真ん中には、昨日の娘が、男の身なりで、肩に小銃を担いで立っている。

「林。」

「はい」

「擲弾筒を持ってこい。お前が射手だ。」

一頭の馬に、擲弾筒と短小銃を載せ、もう一頭に弾薬を載せる。

娘を手招きして、小銃を取り上げ、代わりに腰のモーゼルを渡す。娘はうれしそうに笑う。居並ぶ男たちが一瞬どよめく。林の九九式小銃を肩にする。

頭目たちに、以前の作戦と同じことをやろうと持ち掛ける。彼らに異論はない。集落のはずれには見送りの人たち。あの小梅も交じっている。夕刻にA屯のはずれにつく。ここで野営。小さなたき火を囲んで、銘々眠る。

みんなから少し離れて、火をおこし、横になる。

×月×日

A屯の手前で、本隊と別れる。林、美麗、それと五人の匪賊を従え、A屯の裏側に回る。

×月×日

夜明けと同時に擲弾筒を打ち込む。後から手に入れた正式の迫撃砲も三門。小銃も一斉射撃する。もうもうと土ぼこりが上がり、崩れた土塀から小銃弾を撃ち込む。手榴弾も三個ほど投げ込む。集落の男たちは、よほどの大部隊の襲撃だと思つたのだから、一斉に正面の入り口から逃げて行つた。正面には、本体が布陣していたから、その一斉射撃を受ける。ここで、あつさりと降伏し、白旗を上げる。お互いに思つたほどの損害は出ていない。降伏調印の席に連なる。相手の頭目は、腰のモーゼルを見て、

「モーゼル將軍には、とてもかなわない。」がっくりとうなだれた。

B屯の頭目はA屯の頭目以下その配下「驚いたことには、なんと一〇〇人近くもいた」も従え、C屯攻略に向かった。A屯の留守を託された。残つたのは、林と美麗そして五人の兵だけだ。集落の中を点検する。

残っているのは老人と子供だけだ。家の中には旧式の銃や槍などがある。とりあえずそれらを一方所に集める。残された兵力だけでは心もとないので応援を呼ぶことにした。

×月×日

早朝起こされる。7,8人の男が立っている。持ってきた料理をテーブルに並べる。応援の者らは、仲間のところで食べるという。これだけいけば、守りは大丈夫だろう。扉が叩かれ、林と一緒に老人が入ってきた。

このA屯の長老で、挨拶に来たのだということだ。もともとこのあたりの集落は、むかしから互いに抗争を繰り返していたという。ほとんどの場合、引き分けみたいなものだ。

ところがここに日本軍が進出してきて、すっかりバランスが崩れてしまった。しかも、中国軍の正規兵もしばしば現れるようになった。それまで使われていたものとは格段に違う性能の武器が使われた。

×月×日。

あとからわかつたことだが、アメリカからの兵器の援助だった。それによって闘いの様相も一変した。

長老が言うには、「モーゼル將軍」の力でこの集落を保護してほしいという。

「俺にはそんな力はないよ。」
という、

「將軍はもう、三つの匪賊をうち負かしてしまつた。B屯までいれたら、このあたりで一、二の大頭目・ターランプだ。」

「あはは。何を冗談を言うんだ。」

「冗談は言わない。B頭目も、A頭目も揃つて腰抜けた。わしの知る限り、B太太の方がまだましだ。」

「あはは。二人ともすっかり形無しだな。」

「とにかく、このA屯は將軍に頭目になつてもらいたい。でないとB頭目にひどい目にあわされる。」

これは土産だ、受け取れと言つて重い箱を手渡してくる。

「心配するな、B頭目によく言つておく。」

「・・・」

「とにかく、心配ない。」

猶もくどくと訴える老人を部屋から追い出す。おそらくは過去にB屯を襲い、相当にひどいことをしたのだろう。

その復讐が怖いのだ。こんなことにこっちまで巻きこまれたらそれこそ厄介だ。

(続く)

【特別企画】

打田昇三の太平記(24) 巻第十2

○六波羅攻めの事

足利尊氏を始め反幕府勢力が目指す先は六波羅であるから幕府軍も六万余騎を揃え其れを三手に分けて防御態勢を整えた。一手は神祇官と言う官庁の前で足利軍を防ぎ、他の一手は東寺で赤松軍に向かい、残る一手は竹田・伏見の上部で千種軍と戦う任務が与えられた。それらの戦場ではほぼ同時に合戦が始まり戦塵、馬煙が靡き、鬨の声が天地に響き渡ったのだが、足利軍が向かった場所が幕府軍でも勇猛で知られた陶山・河野と言う武将が率いる精鋭二万余騎が守って居り攻める方は其れを知っていたから行動が慎重になる。暫くは両軍相互に距離を置き、暇潰しに矢を放っているだけで合戦と言うより睨み合い状態が続いた。

其の中に寄せ手の中から櫛色(黄緑)の鎧に薄紫の母衣(ほろ)を掛けた武者が一騎で敵陣の前に現れ馬上から大声で名乗りを上げた。

「我が身は其の他大勢なので、知る人は居らぬと思うが、足利殿の家臣にて設楽(しだら)五郎左衛門尉と申す。六波羅殿の御身内にて我と思わ

んお方が有れば懸け合って手柄の程を示されよ」

言いながら三尺五寸の大太刀を抜いて兜の正面に振り翳した。其の勢いが一騎当千の武士に見えたので敵も味方も合戦最中であることを忘れて見物することにした。暫くして、六波羅勢(守備軍)から五十歳程の老武者が白栗毛の馬に跨って現れ

「…其の身、愚蒙なりと雖も多年、奉行の列に加わり末席を汚す家系である。人は筆取(文官)と侮り敵として不足に思うかも知れぬが、我らが祖先是藤原北家、魚名から続く鎮守府將軍・利仁であり、其の十七代末孫、齋藤伊豫房玄基と申す。

本日の合戦、敵も味方も共に大事なれば、命を惜しむことは無い。もし、生き残る者が有れば我が忠戦を子孫に語り伝えて欲しい」と叫んだ。

そこで馬上での組み合いとなり二人が同時に転落した。設楽は少し力が有ったので齋藤を組み伏せて首を取ったけれども其の際に齋藤が手を刺したからどちらも助からない。其れに続き、足利軍から現れた武士が馬上で長めの太刀を抜いて肩に懸け、敵陣の近くに寄って挑発した「…源氏代々の武士だが有名では無いから良い敵にも会えなかつた。是は足利殿の家中で大高二郎重成と申す。聞けばそちらの陣には、度々の合戦で高名された陶山備中守、河野対馬守が居られるとか、出て来て勝負の様を人々に見せようぞ！」

指名された二人のうち陶山は他の戦場に行っていたが、河野は陣中に居たので指名に応じて戦おうとした。其れを見た養子の七郎通遠と言う十六歳の若武者が「…父親を討たせてなるものか！」と駆け寄り大高に組んで来た。大高は「…子供を相手に出来ない！」とばかり七郎の鬘を掴んで放り投げようと相手の笠印を見れば河野の家紋が付

いている。そうなると事情が変わってくるので、片手で敵の膝を斬り弓を投げ返した。河野対馬守は目前で息子を討たれたのであるから自分も討死しようとして大高に迫り三百余騎が是を助ける。足利軍も大高を救援する一千余騎が向かい、両軍が入り乱れての大激戦となった。

寄せ手は六波羅を目指し、幕府軍勢が是を防ぐのであるから戦場は其れに従って移動するのだが「攻撃は最大の防御なり」と言う様に幕府軍の景気は次第に悪くなってくる。戦場が一条、二条と京都中心街を移動し遂に本隊は六波羅の本陣に集結する…と言うより、其処に追い込まれた。それでも要所を護る幕府軍の中には真面目な者も居たように、東寺を攻めた赤松入道圓心の三千余騎は粗末だが執拗な敵の防御陣に苦心していた。

楼門の辺りに頑丈な障害物を置き、周囲の堀を補強し堀を深くして杭を打ち込み、橋は移動式に改良してある。近寄れば一斉射撃で護るつもりなのである。寄せ手一同が対策を考えている時に播磨国の住人・妻鹿(めが)孫三郎長宗が馬から飛び降り弓で堀の水深を測った。弓の端が少し出る程なので背は立たぬと思ひ鎧兜を捨て、太刀を抜いて肩に掛け堀に飛び込んだところ水深は胸までしか無い。其れを見た武部七郎と言う背の低い武士が飛び込んだ。当然だが水位は兜を越える。

妻鹿は「我に取り付いて揚がれ！」と声を掛けたので武部は妻鹿に取り付き、其の肩に乗ってから敵側の岸に渡った。妻鹿は笑いながら「…そなたは我を橋にして堀を越えたな。憎い奴め！其の堀を引き破って捨ててくれよう！」と、堀の柱を大力で引き抜いたので、周りの壁や柱の周りに積み上げてあった土も崩れて堀の一部が埋まった。

武部と妻鹿を先頭に、攻撃軍は其処から突入したのだが敵は櫓などから一斉に射掛けてくる。妻鹿も鎧・兜の各所に矢を受けたが高櫓の下に入り込み金剛像の前で矢を抜いた。其の姿はどちらが仏像か分からぬほどであった。

守る幕府軍は一万余騎を分散配備していたのだが木戸口が危ないというので一手になり東寺の東門に集結して一気に打ち出した。是により調子良く攻め込んだ武部、妻鹿らの状況が不利になる。

そこで赤松入道が息子たちと三千余騎を引き連れて救援し、激戦の末に幕府軍勢は打ち負けて六波羅へ退いていった。勝ちに乗った攻撃軍は四方から攻めていた軍勢を一旦、集結させてから五条の橋・七条河原まで再配備して六波羅を囲みわざと東を開けて置いた。是は敵の団結心に動揺を生じさせる作戦である。その上で指揮官の千種忠頭は「：敵側に救援が来る前に攻め落とすよう」敵命したのだが容易な事では無い。そこで出雲・伯耆の軍勢が荷車数百台を集め近辺の民家を壊し其れを積み重ねて門に火をつけた。酷い話であるが其れを実行したのは「天皇の軍隊」である。

此の時、幕府がお護りにしていた別な天皇の側にも相応の兵力が有ったので簡単に負け無くても良い筈なのだが：天皇・皇族・公家などは泣き叫びながら闇に紛れて何処かへ逃げるだけである。原本には「：義を知り、命を軽んじて残り留まる兵（つわもの）僅かに千騎にも足らず：」とある。上が上なら下も下、世の中は、良く出来ている。

○主上・上皇御沈落の事

「御沈落」は聞かない言葉だが、俗に言えば困った！とか、落ちぶれた！と言うことであろう。

身分は高くても人間には浮き沈みがある。幕府軍不利で残る兵力が千騎程になり、寄せ来る敵を防ぎ難くなったので、糟谷三郎宗秋と言う幕府の忠臣が「：敵に囲まれたけれども東が未だ空いているので天皇・上皇などを敵に奪われないうちに東へ緊急避難して下さい」と上司に進言した。

佐々木判官時信が勢多の橋を準備しているのので其の兵力を警護に回せば近江国は通れて、途中の美濃・尾張・三河・遠江には敵が居ないから無事、鎌倉に着き、そこで勢力を挽回できる：天皇・上皇（後伏見・花園両上皇と光厳天皇だと思われる）が鎌倉に居れば関東の武士団が味方に付く：と言う想定である。何よりも敵に囲まれて不安全な場所に天皇・皇族を籠らせ武門の名折れになることが口惜しい：と強調したのである。

言われてみれば其の通りである。六波羅の重臣たちも納得し、まず皇族などの女性・子供や武士以外の者たちを安全に逃がしてから囲みを破って脱出しようと決め、其れを該当者に伝えた。相手は偉そうにしているだけで何の知恵も能力も無い連中なので只々驚くだけであるが、逃げる段取りは早い。先行きを考えずに我先にと走り出した。

北条一族の越後守仲時も奥方を呼んで逼迫した事情を話し幼い松寿丸を連れて脱出する様に命じたのだが奥方は嘆き悲しんで別れを惜しむ。原本には仲時の事しか書いて無くて古代中国の項羽と虞美人の例を載せているが英雄・武士で有ろうと庶民であろうと別離の悲しみは変わらない。緊急の場合であるから北条一族も北条氏に擁立された天皇も逃げ回るのに精一杯だけである。

六波羅に残留して攻撃軍と戦った兵たちが生き延びる道は全く無かったが、六波羅に火を掛けて

脱出した者たちも安全が保障された訳では無い。行く先々には落武者などを狙う野武士の集団が暗闇にお待ちしていて矢を射掛けてくる。先ず大将の北条時益が頸を射られて落馬した。部下の糟谷七郎が駆け寄り親切に矢を抜いてくれたので直ぐ息が絶えた。守備兵は付いているのだが敵が何処に居るか分らないので防衛や反撃が出来ず、それぞれの単位で逃げる途中であるから助けたり味方に知らせることなどは出来ないし、する余祐も無いのである。糟谷は泣く泣く主君の首だけを取り外し？錦の直衣（ひたたれ）に包んで田の中に埋めから、自分も其の上で切腹した。

天皇の御一行も必死で十数キロを逃げて振り返れば、六波羅の幕府庁舎が燃え上がる火灯りが見える。途中で待ち受ける連中は狙う相手が天皇でも足軽でも関係無く、本人が其の身に付けている品物が欲しいだけなので人の気配を感じれば遠慮なく暗闇から矢を射掛けてくるのである。其の中に天皇も左の肘を射られた。高貴な身分でも人間は傷口から血が出る。陶山備中守が駆け寄って矢を抜いてくれたから出血が増した。周りが明るくなり、前方の山を見れば野伏らしき五、六百の軍勢が楯を構え此方を狙っている。

其れを見た中吉（なかぎり）彌八と言う備前国の武士が敵陣近くまで馬を寄せ「：忝くも一天の君が関東へ臨行なさる所へ斯様な狼藉を為すは何者であるか！心有る者ならば弓を伏せ、兜を脱いで道を開けよ！逆らう者は召し捕つても通るべし：」と言え、野武士どもは笑って「：一天の君であろうと既に御運が尽きて落ちられるのである：通りたければ身に付けている鎧兜・馬までを残らず此の場に置いて心安く行かれよ！」と言い

捨て、鬨の声を挙げて威嚇する。

怒った彌八は家臣と六騎で野武士が屯する陣へ掛けたんだから相手は慌てて逃げたのだが是を深追いた為に二十数人の野武士に取り囲まれた。彌八は首領らしき男に組み付き相手と共に落馬したのが深田の中である。相手を刺そうと腰の小刀を探ったが取り落としたらしい。相手は既に彌八の首を取ろうとしている。彌八は其の手を抑えて「：暫く待たれよ。申す事あり。：。我は既に太刀を無くして続く味方も居らず、貴殿が此の首を取るの易いが、拙者は幕府家臣でも身分の低い六太郎と申す者なれば何の手柄にもならぬ。無駄な首を取るより、もし我を助けて下さるならば其のお札に幕府が六千貫の銭を埋めた場所を知っているの、其処へご案内致そう。：と申し入れた。

大金の話を目にした野武士は単純に是を信じて彌八を助けたので共に六波羅の幕府庁舎焼け跡へ向かったのだが最初から有る筈の無い金である。あちらこちらを探してから「：残念ながら何者かに奪われた!」と言うことで誤魔化した。

中吉彌八の奇略により難を逃れた一行は其の日のうちに篠原宿に着き、其処で地元の人に頼んで着衣を野良着に替えて貰った。粗末な駕籠も手に入れて、ようやく天皇を乗せた。梶井親王と従者とは其処で別れて伊勢路へ向かい、残された者は鈴鹿山を越えてから伊勢神宮を頼って身を隠したのだが京都へ戻れたのは数年後のことで、天皇も元には戻れたが世を捨てた状態の俣であった。

(続く)

《編集後記》

近年は地球温暖化の影響もあり、異常気象が頻発しています。今年も異常なほどの熱波がコロナ渦に追撃ちをかけるように襲っています。

本風の会も今回で195ヶ月(16年3ヶ月)

まできました。今回、左記にご案内の講演会を「石岡歴史塾Ⅱ」主催で開催します。今泉文彦さんは前石岡市長さんです。お時間が取れましたら是非ご参加ください。

講演会のお知らせ (入場無料)

題目：「歴史 ～今 伝えたいこと～」
講師：今泉文彦
日時：8月28日(日) 13:30~15:00
場所：石岡市まちかど情報センター
主催：石岡歴史塾Ⅱ



「未来に生かす・私たちは歴史の森の中を歩いています」